

2026 年度 前期日程  
名古屋学芸大学大学院 看護学研究科 修士課程 小論文試験問題

【設問】

問 以下の文章は柳田邦夫氏の 20 年前に発行された著書の一部抜粋であるが、現代の状況を踏まえ医療テクノロジーの進化に対して看護師としてどう向き合うべきか、自身の考えを述べてください（800 字以内）。

日頃からコンピュータ・ディスプレイで機械や装置の状態を確認したり、操作をしたりすることが習慣化していると、異常事態発生時には、警報のメッセージが続々と計器に示されることも重なって、運転員やパイロットの注意力はディスプレイや表示パネルに釘づけになってしまう。まさに、＜パソコンの虜にされる眼と両手＞ではないか。

医療の現場でも、同じことが起こっている。診察室にパソコンが設置されてから、医師たちの心と眼が、（中略）パソコンに向けられる割合が圧倒的に多くなったのだ。パイロットが窓の外を見て状況判断をする能力を弱くしつつあるのも、医師が患者の顔色や表情や触診によって病状の度合いを判断する能力を低下させつつあるのも、コンピュータ化時代に特有の落とし穴であり、負の側面だ。

死を目前にした患者が入っている病室でも、時折、奇妙な現象が見られる。重症患者の場合は、心拍数、心臓の鼓動の波形、血中酸素濃度などのバイタルサイン（生命徴候のデータ）を示すモニターを病室に設置している病院が多い。いよいよ死期が近づくと、病室に詰めている家族の眼は、どうしてもモニターに向けられてしまう。心拍数が減り、心拍の波形がだんだん平坦に近づいてくると、家族の眼はモニターに釘づけになる。患者の枕許で手を握り、顔を見つめて、別れの言葉をかけるという、古来誰もがやってきた大事な別れの行為を忘れていることに、誰も気づかない。そして心拍がなくなり、波形が平らになり、医師がご臨終ですと言うと、家族はようやく《ああ死んだのだ》と思い、死者の方に顔を向けることになる。現代において死出の旅に出る人は、データの管理下で、何という孤独な最期を迎えなければならないのか。私は愕然とする。

【柳田邦夫 壊れる日本人 ケータイ・ネット依存症への告別（2005）新潮社 東京 より抜粋】  
※出題の都合上、文章の一部省略。